

無縁化防ぎ文化継承

墓掃除代行業

顧客の半数が県外在住

県外への引越や高齢などの理由で墓の管理がままならない墓主に代わり、清掃を請け負う業者が注目されている。那覇市真地の「うーとーとーおきなわ」（仲田英安理事長）は墓の定期的な清掃から補修、建設申請代行までを担当。シーミー（清明）入りを前に、仲田さんは墓の無縁化の防止や祖先を敬う沖縄文化の大切さを説く。

荒れ放題見て3年前創業

個人墓などが集中する那覇市識名。仲田さんは早朝から慣れた手つきで墓の周囲の雑草を刈り取り、ほろほろかき集めた。現在の顧客70件のうち、過半数の40件は県外在住の県出身者。経済や家庭的な事情で所有者が墓を管理できなくなり、やむにやまれず依頼するケースが大半を占める。清掃は年間契約が基本で1件あたりの代金は1回につき3000円。掃除の所要時間は約40分ほどだが

核家族化も要因

「ひと月に一度掃除をすれば、一回あたりの労力はそれほどいりません」と仲田さん。作業をひと通り済ませると墓前に手を合わせた。

「清掃を依頼するのは、墓と先祖に対して愛着を持っている証拠」と仲田さん

「墓を大切にすることが沖縄文化の継承につながる」と話す仲田さん＝那覇市識名



（天久仁）

は言う。県外で自動車メーカーの営業を経た後に帰郷。無縁化して荒れ放題の

た。子どものころから実家の墓掃除を手伝い、墓を基本とした年中行事に親しんできた経験が起業を後押しした。3年前に墓の清掃代行業を始めて現在に至る。

日ごろ墓と接して、感じることは多い。「核家族化が進み、年中行事を知らせる役割だったおばあさんと同居する家族が少なくなつた。そのため、墓を大切にすることが希薄になったのではないか」と仲田さんは

県内では戦前からの亀甲墓など特殊な例があるが、墓地の建設は墓地埋葬法に基づき県知事の許可が必要とされ、個人の所有は原則認められていない。一方で、1972年の復帰後に法律が適用されたものの、特例で個人墓の建設が容認

広域行政を提起

なつた結果、雑草が生い茂り、ハブが生息したりごみの不法投棄の温床となつた墓も数多くある。

2011年度には墓地認可権が県から市町村に委譲され、各自自治体ごとの墓地行政の取り組みが求められる。仲田さんは「墓をきちんと管理するためには広域で協力することが必要。社会構造の変化は仕方ないが、墓はずっと残っていくものだから」と提起した。

人生を充実させる転機に

グリーフケア講演会

死別など、何かを失う体験による心の痛み「グリーフ」のケアを考える講演会が14日、那覇市内で開かれた。講師の鹿児島大学大学院准教授の土岐篤史さん＝写真＝が、グリーフケアとは、喪失体験によって変わってしまった人生に新たな意味を見つけ、生き方を再構成していく作業であり、つらく痛い喪失体験が、人生を充実させる転機にもなりうるという説明。そのため

鹿児島大大学院・土岐准教授



には、本人が喪失体験を「語る」ことが大切とした。

精神科医でもある土岐さんは、病気や障害のある子どもやその親とかかわってきた。患者本人は病気になることで健康や「自由な行動」などを失う。親も同様に日常や「思い描いていた未来」を失い、ときに死別という形でわが子自身を失う。多くの喪失体験にふれて、グリーフケアに関心を持つようになった。

土岐さんは、当事者が信頼できる人に自分の喪失体験を語りグリーフを癒す「ナラティブ（物語、語り）・プラクティス」について説明。

当事者が思考を整理し、自分の中に感情が出来事とともに物語となって練られ、語る本人も気づいていなかった視点が見えてくる。そこから、喪失体験に何らかの意味付けをして自分なりに納得し、人生に折り合いを付けていくことができるとした。

周囲の接し方の注意点を話し、相手が自分の気持ちを話すまでは急がないこと、自分の価値観を押しつけない、寄り添う気持ちを忘れず、グリーフの一般的理論は頭に入れないものも否定しないことなどを挙げた。語る人が心の整理をしやすいよう「思い出話をしていい？」と水を向けた。適切な質問をするのも必要だと強調した。

喪失の痛み 語り癒やす